

ほんちようにじゅうしこう

## 本朝廿四孝

〔解説〕

明和三年（一七六六）大坂竹本座にて初演。近松半二ほかの合作による、五段構成の時代物です。将軍足利義晴を殺害した齋藤道三らを討ち取るため、長尾謙信と武田信玄は互いに反目しているように見せかけ、目的を遂げる、というのが主筋です。諏訪湖の御神渡りの伝説を踏まえた四段目の「十種香」「奥庭狐火」は、特に有名です。

〔あらすじ〕

足利将軍義晴公が暗殺され、武田信玄、長尾謙信に嫌疑をかけられています。長尾・武田両家の仲を取り持つため、信玄の嫡子勝頼と、謙信の娘八重垣姫が許嫁となります。

「十種香の段」八重垣姫は、切腹したと聞かされている許嫁の勝頼の絵姿を前に、回向しています。また、身代わりとなって切腹した偽勝頼の恋人であった腰元の濡衣も、亡き恋人を偲んでいます。そこに、花作りの蓑作に身をやつした勝頼が現れます。勝頼の絵姿にそっくりの蓑作に、八重垣姫は思わず縋りつきますが、勝頼は、自分蓑作であると言います。そこで八重垣姫は、蓑作との恋の仲立ちを濡衣に頼みますが、濡衣はその代わり

に、長尾家が武田家から借りたままになっている重宝「諏訪法性の兜」を盗み出すように言います。そのことから、八重垣姫はやはり蓑作こそ勝頼であると悟りますが、勝頼は真実を話しません。八重垣姫が自害の覚悟を示すと、ようやく蓑作は勝頼であることを認め、二人は抱き合います。

そこへ謙信が現れ、蓑作に、信濃の塩尻へ文箱を届けるよう命じます。急いで発った蓑作に、追っ手を差し向ける謙信。蓑作が勝頼であることを見破っていて、勝頼を討つというのです。八重垣姫はやめてくれるよう必死で願いますが、謙信は武田方の間者である濡衣を引っ立てて行ってしまいます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

# 十種香の段

敷所ふしどへ行く水の。流れと人の簑作が姿見かはす長袴、悠々として一間を立ち出で、

「われ民間に育ち人に面を見知られぬを幸ひに花作りとなつて人込みしは、幼君の御身の上にもし過ちやあらんかと、余所ながら守護する某、それと悟つて抱へしや。ハテ合点の行かぬ」

とさしうつむき、思案に塞がる一間には、館の娘八重垣姫いみなぎけ許嫁ある勝頼の切腹ありしその日より一間所に引籠り、床に絵姿かけまくも御経誦のりんの音。こなたも同じ松虫の鳴く音に袖も濡衣が、今日命日を弔ひの位牌に向ひ手を合はせ、

「広い世界に誰あつて、お前の忌日命日を弔ふ人も情けなや。さぞや未来は迷うてまよらう。女房の濡衣が心ばかり

のこの手向け、千部万部のお経ぞと思ふて成仏して下さんせ。南無阿弥陀仏、くくく」

「誠に今日は霜月廿日。わが身代りに相果てし勝頼が命日。暮れ行く月日も一年余り。南無幽霊出離生死頓生菩提しむつりしじょうじんとんしょうぼだい」

「申し勝頼様、親と親との許嫁、ありし様子を聞くよりも、嫁入りする日を待ち兼ねて、お前の姿を絵に描かし見れば見る程美しい。こんな殿御と添ひ臥しの身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも楽しみは、絵像の側で十種香の、煙もこうげ香花となつたるか。回向せうとてお姿を絵には描かしはせぬものを、魂かへす反魂香はんこんこう、名画の力もあるならば可愛とたつた一言の、お声が聞きたいく」

と、絵像の側に身を打ち伏し、流涕こがれ見え給ふ。

「あの泣き声は八重垣姫よな。わが名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡衣。不憫ともいちらしとも言はん方なき二人が心」

と、そゞろ涙にけれけるが。

「ア、われながら不覚の涙」

と、襟かき合はせ立上る、後にしよんぼり濡衣が、

「申し簀作様、合点の行かぬはあなたのお姿。どうした事でこの様に」

「ホ、不審もつとも。計らずも謙信に抱へられたる衣服大小」

「テモさても、衣紋付きなら袴の召し様まで、似たとはおろかやつぱりその儘。『形見こそ今は仇なれこれなくば、忘るることもありなん』と、詠みしは別れを悲しむ歌。形見さへぢやにわが夫に微塵変らぬこのお姿。見るにつけても忘れぬ、わたしや輪廻に迷ふたさうな。御赦されて」

と伏し沈む。泣く声洩れて一間には、不審立ち聞く八重垣姫、そつと襖の隙間洩る、姿見紛ふ方もなく、『ヤア我が夫か、勝頼様』と、飛び立つ心押し鎮め、

「正しうお果てなされしもの、似たと思ふは心の迷ひ。絵像の手前も恥ずかし」

と、立ち戻つて手を合はせ、御経誦誦とくしゆのりんの音。勝頼公は濡衣が心を察して声曇り、

「はかなき女の心から嘆くは理り、さりながら、定めなき世と諦めよ」

と諫むる詞こなたには、心空なるその人の『もしや長らへおはすか』と、思へば恋しく懐かしく、また覗いては絵姿に、見比べる程生写し、

「似はせでやつぱり本々の、勝頼様ぢやないかいの」と、思はず一間を走り出で、縋り付いて泣き給へば、『はつと思へどさあらぬ風情

「こは思ひ寄らざる御仰せ。われら簀作と申す花作り、漸ようよう々只今召し抱へられ、衣服大小改めし新参者。勝頼とは覚えなし。御鹿忽あるな」

と突放せば、

「ム、なんと云やる。今父上に抱へられし新参者花作りの  
簀作とや。自らとしたことが余りよう似た面差し、もしや  
それかと心の煩惱二人の手前恥づかしながら、コレ濡衣、  
この簀作とやらいふ人を、そなたはどうから近づきか」

「エ、」

「いやいの、知る人であらうかの」

「アノお姫様としたことが、たつた今見えたお人。なんの  
マア私が」

「イヤ隠しやんな、今の素振り。忍ぶ恋路といふよふな可  
愛らしい仲かいの」

と、思ひも寄らぬ詞にびつくり、

「オ、お姫様の仰る事はいの。人にこそよれなんのあなた  
に勿体ない」

「ム、勿体ないと言やるからは、どうでもそなたの知る

辺の人か」

「イ、エ、そふではなけれども、大事のお主の目を掠め、  
忍び男を拵しらへるは、勿体ないと申す事でござります」

「すりや知るべの人でなく殿御でもない人なら、どうぞ今  
から自らを可愛がつてたもるやうに、押しつけながら仲立  
ちを頼むは濡衣様々」

と、夕日まばゆく顔に袖、あでやかなりしその風情。

「オ、お姫様としたことが、まだお子達と思ひのほか、大  
それたあの簀作殿を」

「サア、見初めたが恋路の始め。後とも言はず今こゝで」

「仲立ちせいとおつしやるのか、我折れ。ほんに大名のお  
娘御とて油断はならぬ恋の道。品によつたらお取持ち致し  
ませうが」

「コレ、濡衣、必ず免忽言ふまいぞ」

「サア、なにかも私が呑込んで、ナ呑込んでお取持を致

すまいものでもないが、真実底から簀作殿に、御執心でござりますか」

と、問はれて猶も赤らむ顔、

「勤めする身はいさ知らず、姫御前のあられもない。殿御に惚れたといふことが嘘偽りに言はれうか」

「そのお詞に違ひなくば、なんぞ確かな誓紙の証拠。それ見た上でお仲立ち」

「オ、それこそ心易い事。その誓紙さへ書いたらば」

「イエ、それもこつちに望みがある。私が望む誓紙といふは、諏訪法性の御兜。それが盗んで貰ひたい」

「ヤアなんとやる。諏訪法性の御兜を、盗み出せと言やるのは、さてはあなたが勝頼様」

と言ふ口押へて、

「ハテ滅相な勝頼呼ばはり。微塵覚えのない簀作、鹿忽ばし宣ふな」

と、言ふ顔つれづれ打ち守り、

「許嫁ばかりにて枕交はさぬ妹背仲、お包みあるは無理ならねど、同じ羽色の鳥翼。人目にそれと分らねど親と呼び、又つま鳥と呼ぶは生ある習ひぞや。いかにお顔が似ればとて、恋しと思ふ勝頼様、そも見紛ふてあられうか、世にも人にも忍ぶなる御身の上といひながら、連添ふ私になに遠慮。つひかうくとお身の上、明かして得心さしてたべ。」

それも叶はぬ事ならば、いつそ殺してく」と縋り付いたる恨み泣き。